

相沢がエリスに豊太郎が帰ることを伝えた理由

私がこの理由を追究しようと思った動機は、相沢はあんなに豊太郎のことを大切にしていたのに、なぜエリスと豊太郎の人生が大きく変化する大切な事をなぜ豊太郎から直接伝えさせてあげなかったのだろう思ったからである。

この疑問の理由は優柔不断な豊太郎が日本へ帰ることを直接エリスに伝え、エリスに反対されエリスの意見を聞いて、豊太郎の心が変わる前に相沢からエリスに伝え、形として形成しておきたかったのである。

まず豊太郎は官僚としてドイツに渡ったのに、エリスに出会い官僚から降ろされ職を失った。そんな時に相沢は日本にいたにも関わらず、豊太郎に職をつけて助けの手を差し延べてくれた。

これは 279 頁 6 行目「このとき余を助けしは～報道せしむることとなしつ。」から分かる。

これはエリートの道を幼い頃からずっと歩んできたはずが、今は惨めな立場におかれている豊太郎を同じような道を歩んできた相沢から見てほおっておけなかったのだ。

そして相沢は豊太郎の日本にいた時の優れた能力を知っていたので、エリスに出会い道を外した豊太郎を自分と同じ道に取り戻し、共に自分が秘書を務める天方大臣の元で働きたいと思った。その理由は相沢にとって天方は自分の上司であり大切な人なので、天方が出世することは相沢にとってもいいことである。だから豊太郎が優秀なことを知っていた相沢は、天方の元で働かせたかったのだ。

そのためには天方に豊太郎を気に入ってもらわなければならない。

そのために相沢が天方と共にドイツに来た時には豊太郎に手紙を出し、283 頁 7 行目「汝が名誉を回復するもこのときにあるべきぞ。」と言った。そして相沢の元へやってきた豊太郎をろくに私的な話をもせず天方へ合わせ、ドイツ語で書かれている書物を翻訳するという仕事を任せたのだ。

これは 285 頁 6 行目「別後の情を細叙するにもいとまあらず、引かれて大臣に渴し、委託せられしは独逸語にて記せる文書の急を要するを翻訳せよとのことなり。」よりわかる。

またロシアに行く時も豊太郎を誘い、翻訳した文の賃金の他に旅費まで持たしている。

そこまでもして豊太郎をロシアへ連れて行きたかったのであろう。

ロシアでは 289 頁 7 行目「我が舌人たる任務はたちまち」から 290 頁 3 行目「また多くは余なりき。」からわかるように、

宮廷で通訳をしたり客人と主人との間を取り持ったりしていた。

そうして天方の信頼も集めていった。つまり相沢の作戦は成功である。

また相沢の発言 286 頁 5 行目「この一段のことはもと生まれながらなる弱き心より出でしなれば、今さら言わはんも甲斐なし」からわかるように、

相沢は豊太郎の性分を知っているので、豊太郎が優柔不断なことも知っていたのであろう。豊太郎がこの時優柔不断なのは 287 頁 3 行目「我が弱き心には思ひ定めん由なりが、しばらく友の言に従ひて、この情縁を断たんと約しき。

余は守るところを失はじと思ひて、己に敵する者には抗低すれども、友に対して否とはえ答えぬが常なり。」から曖昧な決断をしていることからわかる。

また 293 頁 10 行目「我が心はこのときまでも定まらず、故郷を思う念と栄達を求むる心とは、時として愛情を押しとせん」から

まだ心に強く決めているわけではないことがわかる。

相沢は先ほども述べたように、天方の元で豊太郎と共に働きたったので、豊太郎をどうしても官僚である自分の道へ引き戻す必要があった。

そのために優柔不断な豊太郎が自ら日本に帰ることをエリスに伝えて、エリスに反対されエリスの意見を聞いて、日本へ帰らないと心が変わってしまわないように、

相沢からエリスに伝え「日本に帰る」という決断が豊太郎の心の中のものではなくて、形として形成しておきたかったのである。

また天方の元に豊太郎のような優れた人材を引き連れたことから、天方のためを思っているということをアピールして、

天方のより大きな信頼を得ようとしたのかもしれないと考えられるが、これは推測でしかない。